南半球便り（その６）：クイーンズランド州訪問

3月11日

（1） はじめに
前々回の南半球便りでは，ダーウィンを州都とする北部準州への訪問記をまとめました。今回は，北部準州訪問に続いて，豪州北東部のクイーンズランド州を3月1日から4日まで訪問してきました。

実は豪州に赴任するに当たり，20年以上前に駐豪大使を務め，今なお多くの豪州人から慕われている，私の尊敬する大先輩からこう諭されました：
「キャンベラにいるのは週に一日で良い。あとはとにかく，地方の州を回るべき。それでこそ，広いオーストラリアを理解できる。」その教えに従い，過密日程を押して訪問した次第です。

（2） 日本とゆかりの深いサンシャイン・ステート
（ア） 資源エネルギー・食料の主要供給源
クイーンズランド(QLD)は，面積では日本の4.6倍に上る広大な州です。人口は約516万人。我が国の石炭輸入の22%，牛肉輸入の31%，砂糖輸入の69%がQLD一州によって賄われているという驚くべき統計があります。

同州選出の連邦下院議員が私にこう言いました。「QLD州は，日本が進出するまでは，単なる農業州だった。そこで炭鉱を堀り，開発を進め，石炭まで主要輸出品にし，QLDを本当に豊かな州にしてくれたのは，日本企業の功績。」
そのQLDが，今は水素開発に高い関心を寄せているのです。

キャンベラやシドニーから州都ブリスベンに来ると，ただでさえ紫外線が強い豪州の日差しが益々ギラギラと照りつける様を実感します。まさに，「サンシャイン・ステート」（別称）にふさわしい陽光です。

パラシェ首相へ表敬訪問

（イ） 歴史

司馬遼太郎氏の名作短編小説「木曜島の夜会」の舞台となったトレス海峡の木曜島は，QLD 州の最北部に位置します。かつて和歌山県他からダイバー達が続々と来訪し，真珠採りのメッカとなった土地柄です。

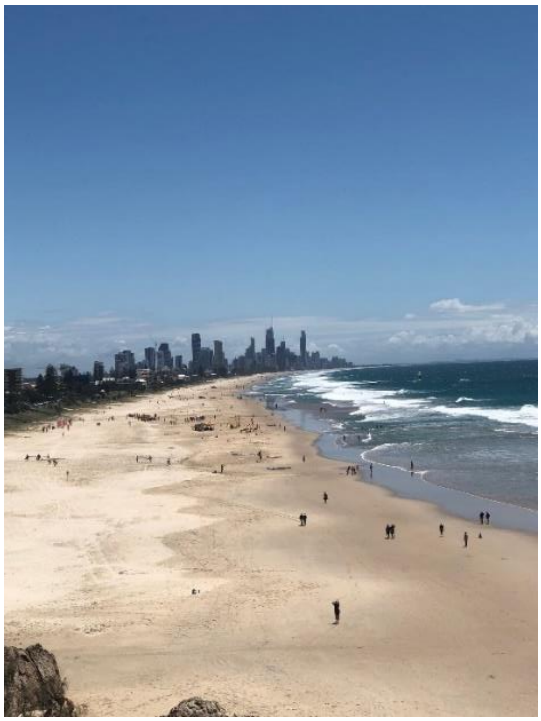
日本政府が明治 29 年に豪州での在外公館として初めて開設したのがタウンズヴィルの領事館。この QLD 州にあります。今年は開設 125 周年に当たります。QLD 州の姉妹県は埼玉県，州都ブリスベンの姉妹都市は神戸市という関係もあります。

このような各種のつながりもあり，QLD 州の日本語学習熱は高く，学習者は 13 万人を超え，全豪で 1 位です。

デ＝ジャージー州総督へ表敬訪問

（3） 「ゴールド・コーストよ，もう一度。」

実は，多くの日本の方には，ゴールド・コーストやグレート・バリア・リーフがある州，といった方が分かりやすいかも知れません。



ゴールドコーストの景色

私も，今回ブリスベンだけでなくゴールド・コーストにも赴き，両地で日本人会や日本商工会の役職者の方々の貴重なお話をうかがってきました。バブル期には日本の投資が席巻し，相次ぐ芸能人やスポーツ選手の来訪が話題を呼んでいたリゾート。バブル崩壊と共に多くが撤退してきた中，日本の存在感をどうやって高めていくか，熱く意見交換しました。

豪州のコロナ対応への評価が高まり，「安全」な豪州への不動産投資の意欲の高まりが感じられる中，どうしたら日本の人と資本が戻ってくるのか，在留邦人のみならず，豪州側の大きな関心事項になっています。

かつてハワイへのリピーターであった私から見ても，突き抜けるように高い青空，勢いよく波頭を立てて砕ける波と白く広い砂浜が広がり，インフラが整ったゴールド・コーストの魅力は，実に大きなものがありました。今なお１万人を超える日本人の方が居住されている理由が，よくわかりました。

（４） 大学との交流

今回の訪問で意識的に重視したのが大学訪問です。クイーンズランド大学，クイーンズランド工科大学，グリフィス大学の名門３校を回り，日本と QLD との間の交流強化に向けて意見交換を行いました。

クイーンズランド工科大学を見学

ブランド力のある米国や英国の大学が伝統的にいささか過大な評価を受けてきた中，どうやって豪州の大学の質と知名度を高め，各国から優秀な学者と学生をより多く集めるか，彼らが熱心に腐心している姿がうかがえ，強い印象と好感を抱きました。

日豪間の研究交流，学生の往来の活発化に向けて大使館として側面支援するだけでなく，自分としても講演，セミナー参加などの方法で積極的に貢献していきたいとの気持ちを新たにしました。

（５） 次はケアンズ，木曜島に

今回残念であったのは，ケアンズ沖合に停留していたサイクロンのため，ケアンズ訪問を見合わせ，再調整せざるを得なくなってしまったことです。いずれにせよ，次回はケアンズやタウンズビル，さらにはその先にある木曜島に足を伸ばし，日豪関係の来し方行く末に思いを巡らせてきたいと念じています。

山上信吾